

2025年8月30日（土）

老球の細道 884号

8月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富 仁

記録的な雪、記録的な暑さと今年は記録的な天候が続く。次はどんな記録的な気象変動が起こるのだろう。爺様、婆様は熱中症に気をつけてクーラー、扇風機をガンガン使えと鼓舞される。冷え冷えのビールも味方し、運よく熱中症にならずに秋を迎えることができる。

孫の夏休みに乗じて、今はなき朝のラジオ体操代わりに「朝バスケ」を実施した。爺、息子、孫の4人で、あいず体育館屋外コートで朝の涼しい時間帯に約1時間半、シュート練習を中心に熱くなって練習した。合計20回、孫が休まず続けてくれて、夏休みの宿題日記に爺のことを書いてくれたことが何よりの「ひと夏の経験」であった。

1・読書から

◆「目の前の勝利を左右するのは“勝ちたい”という執念かもしれません。“勝ちたい”という執念を持ち続けて日々、練習に励む。その継続性こそが根性です」〈高畑好秀『根性を科学する』アспект〉：昭和の遺物として否定された根性論は、今やスポ根漫画の中でノスタルジックに語られている。しかし仕事の結果というものは毎日コツコツと努力を積み重ねて花開くものなのではないのか。強い想いと地道な努力から逃げて、何が勝利か！

◆「厳しい指導は今でも成立する。目的のために高い水準を求めることであり、暴言や相手の人格を否定することではない。相手に“成長したい”“うまくなりたい”というモチベーションがあり、指導者に対する信頼が条件です」〈『スポーツジャパン Vol76』JSPO〉：厳しい指導がすぐにパワハラに結び付けられるご時世。本物の「選手ファースト」とは何か？

2・新聞から

◆「はじめにおわりがある。抵抗するなら最初に抵抗せよ」〈朝日：天声人語〉：ジャーナリスト故むのたけじさんの言葉。元朝日新聞記者で、戦争報道で国民を欺いたと終戦の日に朝日を退職した。何事も初めが肝心である。戦争が始まってから反対を唱えても「非国民」扱いである。試合も勝負が決まってから頑張っても遅い。初め良ければ終わり良し。

◆「ねがわくは、この浦上をして世界最後の原子野たらしめたまえ」〈朝日：被爆80年長崎平和宣言〉：長崎原爆被爆後に救援活動にあたった医師・永井隆博士が残した言葉。広島と長崎の惨禍を二度と繰り返さない。補給もない戦地で餓死したり、戦死を前提にした攻撃を課されたり、兵士を悲惨な戦場に旗を振って熱狂的に送り出した時代は二度と来るな。

◆「誰とでも対等に向き合えるために、どんな時にも対等癖をつけておこう」〈朝日：加藤登紀子ひらり一言〉：侮らず、ビビらず、相手をリスペクトしてまっすぐな目線で向き合う。

◆「人は病気になって死ぬ。これを僕は“人の自然”と呼んでいます」〈朝日：養老孟司さんと語る〉：ちょっと病気になると死を意識する年になった。だからラテン語の「メメント・モリ（死を想え）」、それに対して「而今（今を生きよ）」を箴言としている。死んだことは自分では確認できない。だから死を考えてもしかたがないと養老氏は言う。気が楽になった。